

平成15年度 情報工学コース卒業研究報告要旨

| | | |
|--------|--------------------|------|
| 大西研究室 | 氏名 | 伊藤大輔 |
| 卒業研究題目 | 敬語の正しい使い方を支援するシステム | |

背景と目的

敬語を正しく使用することは社会人にとって必要不可欠な能力であると言われている。しかし敬語は文章のみでなく多様な条件(話し手と聞き手の関係や、場面の性質など)から決定されるため、学習が面倒である。また敬語を使う場面の性質上、他人の誤用を指摘したり、自分の誤用を指摘してもらうことは難しい。そのため、場面に応じて使う敬語を自主的に学習したり、チェックしたりできることが望ましい。

本研究では、話し手と聞き手の関係や場面の性質などから、その時使うべき敬語を決定するシステムを作成し、敬語の自主的な学習を支援することを目的とする。

システム概要

本システムでは会社内での会話に限定している。その中で登場人物の違いによって「社内の人物のみ」、「客が登場」、「社員の家族が登場」の3つの場面に分けてそれぞれの処理を行う。各場面において最初に、話し手、聞き手、同席者を入力し『場面情報』を決定する。次に文章(主語、動詞、補語)を入力し『文章情報』を決定する(文章から主語、動詞、補語を判別するのではなく、ユーザーがそれぞれを入力する)。そして『場面情報』と『文章情報』から使用するべき敬語の種類(尊敬語か謙譲語か丁寧語か)と、動詞をその形に変換したものを出力する。

結果・考察

敬語の誤用を指摘する文献(2冊)において挙げられている全ての誤用例(47件)を用いてシステムの評価を行なった。

| | 正しく支援できた | | 正しく支援できなかった | |
|---------|----------|-----|-------------|-----|
| | 文献① | 文献② | 文献① | 文献② |
| 社内の人物のみ | 6 | 4 | 1 | 0 |
| 客登場 | 14 | 8 | 5 | 0 |
| 家族登場 | 1 | 2 | 0 | 0 |
| どれでもよい | 0 | 0 | 4 | 2 |
| 計 | 21 | 14 | 10 | 2 |

正しく支援できなかった場合の主な例は、文章の主語が不定称である場合(誰 どなたなど)や主語が特定人物でなく本システムに適用できない場合であった。つまり文章の形式が「依頼文」や「質問文」である場合に正しく支援ができないことが多い。本システムが要求する情報(主語、補語など)を十分に持っていれば正しく支援できると思われる。